

卒業論文

＜ソーシャルアントレプレナー＞の出現と展開  
—学生 12 人の事例より—

平成 18 年度入学

九州大学 文学部 人文学科 人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専攻

平成 22 年 1 月提出

## 要約

本論では、ソーシャルアントレプレナー（以下、SE とする。）の出現と展開を探り、それを参考にしながら、その卵にあたる〈ソーシャルアントレプレナー〉（以下、〈SE〉とする。）の出現と展開を探り、その要因を明らかにした。〈SE〉に必要な要素は、①「社会性」を帯びること（；「社会をよりよくしたい」という意識を持つこと）と、②「事業性」を帯びること（；その具体的な課題を見つけ、自分がコミットしていく解決手法を語れること。そして、さらに実践していること）としたうえで、学生 12 人を対象とした調査を実施した。その中で、①の社会性を育む要因は、「徳育」であると判明した。また、②の事業性を育む要因は、「目的を持ったチャレンジを繰り返すこと」であると判明した。

多くの人が社会に不安や不満を抱いている一方で、「社会に貢献したい」という意識が高まっている現代では、市民ひとりひとりが社会を変えるために活動することが適当である。しかし、そのような生き方をしている SE 自体も、今ようやく注目され支援体制が整えられ始めたという現状であり、〈SE〉の育成にまでは手が回っていない。専門家も今、議論を重ねている段階ではあるが、学生の目線から見ることで何か見えるものがあるのではないかと思い、ここで調査し、知見を述べた。

第 1 章では、SE がどのような背景をもとに出現・展開したのかを代表的な国の事例を用いて紹介するとともに、日本での活動状況や支援状況を紹介する。

第 2 章では、SE の自伝をもとに、個としての SE がどのように出現・展開するのかを明らかにしている。そして、SE の育成の不十分さを指摘し、問題提起をする。

第 3 章には、実際に行った調査のデータを載せている。多少の編集を加えたものの、基本的にはインタビュー対象者の語ったものに忠実な文章である。

第 4 章では、インタビュー対象者の 12 名を〈SE〉のレベル別に分類し、その特徴を見る。その後、そのレベル間の経験の差を比較するとともに、SE の経験とも比較し、生じた差異の要因を考察する。

第 5 章では、本調査で得られた僅かばかりの知見をまとめ、〈SE〉が出現・展開するための環境作りについて考察を加える。

—目次—

はじめに	1
第1章 ソーシャルアントレプレナーの活動と理論	3
第1節 ソーシャルアントレプレナーの定義	3
第2節 ソーシャルアントレプレナーが出現・展開した社会的背景	4
(1) アメリカ	5
(2) イギリス	6
(3) 日本	7
第3節 ソーシャルアントレプレナーの活動の実態	10
(1) ソーシャルビジネスの認知度	10
(2) 社会的課題取り組みの現状と今後の方向性	11
(3) 今後の傾向	11
(4) 抱える課題	12
第2章 人はどのようにしてソーシャルアントレプレナーになるのか	13
第1節 ソーシャルアントレプレナーの自伝をもとに	13
(1) グラミン銀行総裁 ムハマド・ユヌス氏の場合	13
(2) NPO 法人フローレンス代表理事 駒崎弘樹氏の場合	15
第2節 ソーシャルアントレプレナーの育成	18
第3章 調査～学生12人を対象として	20
第1節 調査概要	20
(1) 目的と仮説	20
(2) 調査方法	20
(3) 調査対象	20
第2節 調査データ	20
第4章 考察～人はどのようにして<ソーシャルアントレプレナー>になるのか	51

第1節 <ソーシャルアントレプレナー>の出現と展開における分類 /51

第2節 <ソーシャルアントレプレナー>になるために必要な要素・経験 /54

(1) インタビュー対象者内での経験の比較より /54

(2) ソーシャルアントレプレナーの経験との比較より /56

第5章 <ソーシャルアントレプレナー>の出現と展開のために・・・・・・・・・・ 61

参考文献・参考 URL 一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68